



關東血氣物語
古今俠客傳

一名關東血氣物語
舊号古今俠客傳



門 伊 13
番 2679
巻 1-4





櫻山文庫
惣目録



才

の野十郎左馬の事

下谷弓之助左馬の事

のつき斎左馬の事

丹前守也同左馬の事

高木仁左馬の事

死人小左馬の事

才

唐大組の事



丹波和泉左又又

夏の市市嘉り事

晩乃久ハ観童坊事

くぬれ駒四市嘉り又

中三

長久郎蔵嘉り事

半鐘ハちり又

鏝乃源右所り

柏崎市ちり事

中四

鐘浜た嘉り又

大小神祇社の事

蟹乃五ん嘉り又

平井権ハり事

中五

深見十ん嘉り又

寺西前んの事

中六

牛五嘉り事

猪瀬店嘉りの事

女井足り又

小山田浜市り事

才七

後醍醐天皇の事

生不動と云ふ事

金神長五郎の事

水師十郎左衛門の事

世々くみ聖十郎左衛門先祖と尋ねる水師日向守
勝家の孫より水師出雲守五右衛門の分地あり

大猷院様御小供より五右衛門御寵愛よりなりと云ふ
いふ時次賀蓮花の聲となり二子ありける是ハ
十郎左衛門才ハ又八右衛門其より堀田左衛門といふ
御先祖ありと云ふは美男なりりり君御心を
かきとせむいふ當番乃御あつせむ御意ありける
と御い番のせり御安造と云ふ皆やとて不寐ぬ人ぞと
居るはかきけなくも御志のいせむいふ五郎夜忌乃
いふと云ふはいりる五郎やりるハ相好ぬのうらと

念者ありといふ其海嶽へ海へ入るをいひ翌日既に
石と石並みおきかへ念者ありといふ我々夢ひくれと
この上意あり番次かへ海へ入るをいひ其の出たてん
不残しび出ー今日御前へつゝ上意より石並み
相番より念者ありといふ夢ひくれの御意あり我々
其意も畏るなりかへす御意仕人やふと上意より
何ふふと申せしものの上意より故に彼人難くも人
念しうといふれん其後其後其後其後其後其後其後
海へありわたりていふ人なり上意より海へ入るを
御小姓より言せし御意他へいふことなりかへす
かへすなり三石より其後其後其後其後其後其後其
下され追後其後其後其後其後其後其後其後其後

ゆきさへいへ出雲守後立ー病室より川迄
いへいへいへいへいへいへいへいへいへいへいへ
いへいへいへいへいへいへいへいへいへいへいへ
上たておひいへいへいへいへいへいへいへいへ
有るか賀守よりいへいへいへいへいへいへいへ
御意よりか賀守へ下る出雲守御意よりいへいへ
後立ー障子張りいへいへいへいへいへいへいへ
今日ハ御意よりいへいへいへいへいへいへいへ
先へいへいへいへいへいへいへいへいへいへいへ
いへいへいへいへいへいへいへいへいへいへいへ
相番より御意よりいへいへいへいへいへいへいへ
御意よりいへいへいへいへいへいへいへいへいへ

此に忠雲守へ五十石、賀守へ七千石、下りぬ人と
都合も百石、けり、ちきりへく、人、少く、なれども
出雲守、此、も、けり、残念、な、事、に、ぬ、子、是、二、人、想、候
十、市、人、又、八、市、家、ハ、峰、次、賀、と、の、娘、あり、五十石
若く、家、督、十、市、人、と、ぬ、利、後、なり、人、の、ぬ、
所、あり、ふ、れ、ども、我、ぬ、少く、家、老、量、高、潔、と、ぬ、言
ふ、と、ほく、一、見、見、一、市、母、候、も、毎、事、見、見、せ、る、や
い、と、も、と、か、く、想、え、る、大、事、に、い、ふ、人、と、ぬ、せ、或、
ぬ、ひ、ふ、く、人、候、は、き、折、の、ぬ、一、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
か、う、ぬ、一、瀧、口、信、濃、守、殿、上、取、ぬ、ぬ、十、市、人、と、ぬ、
出、合、し、ぬ、一、一、度、友、の、相、子、人、相、交、ぬ、ぬ、ぬ、
日、一、軍、及、一、小、格、部、あり、ふ、く、用、事、あり、と、
料、理、ぬ、く、人、ぬ、ぬ、一、一、長、門、を、出、る、時、か、い、ぬ、
ぬ、ぬ、家、来、ぬ、ぬ、箱、ぬ、ぬ、ぬ、停、造、ぬ、家、来、ぬ、出、
場、所、や、く、者、の、ぬ、ぬ、成、羽、織、を、ぬ、侍、ぬ、人、建、
ぬ、馬、と、ぬ、ぬ、一、と、ぬ、門、あり、若、る、侍、と、他、の、者
と、ぬ、ぬ、目、候、ぬ、ぬ、ぬ、信、濃、守、の、ぬ、ぬ、ぬ、
ぬ、ぬ、十、市、人、と、ぬ、美、男、少く、丈、六、尺、ぬ、一、人、ぬ、
や、ぬ、家、来、ぬ、人、あり、此、侍、と、十、市、人、と、ぬ、ぬ、
ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
此、有、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
ぬ、ぬ、十、市、人、と、ぬ、大、口、と、ぬ、ハ、世、男、と、ぬ、ぬ、
出、合、候、と、ぬ、ハ、三、井、市、十、市、戸、田、八、市、と、ぬ、ぬ、
い、つ、無、く、別、の、や、ぬ、に、反、逆、ぬ、言、礼、酒、ぬ、ぬ、と、ぬ、

料、理、ぬ、く、人、ぬ、ぬ、一、一、長、門、を、出、る、時、か、い、ぬ、
ぬ、ぬ、家、来、ぬ、ぬ、箱、ぬ、ぬ、ぬ、停、造、ぬ、家、来、ぬ、出、
場、所、や、く、者、の、ぬ、ぬ、成、羽、織、を、ぬ、侍、ぬ、人、建、
ぬ、馬、と、ぬ、ぬ、一、と、ぬ、門、あり、若、る、侍、と、他、の、者
と、ぬ、ぬ、目、候、ぬ、ぬ、ぬ、信、濃、守、の、ぬ、ぬ、ぬ、
ぬ、ぬ、十、市、人、と、ぬ、美、男、少く、丈、六、尺、ぬ、一、人、ぬ、
や、ぬ、家、来、ぬ、人、あり、此、侍、と、十、市、人、と、ぬ、ぬ、
ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
此、有、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
ぬ、ぬ、十、市、人、と、ぬ、大、口、と、ぬ、ハ、世、男、と、ぬ、ぬ、
出、合、候、と、ぬ、ハ、三、井、市、十、市、戸、田、八、市、と、ぬ、ぬ、
い、つ、無、く、別、の、や、ぬ、に、反、逆、ぬ、言、礼、酒、ぬ、ぬ、と、ぬ、

西の山にPなるものありといふもあつたぬさす
 石乃肩よりあつた西の山にたつた病を
 解きしと云ふにたつた死をびくたれ
 山をく山目射（さけ）たがよの故にやけ
 山に事解ぬ宗利始末をさく軍に語ぬ
 此の記遺書なるものも中にもやういふ
 おひゆのなるものも中にもやういふ
 成りしと云ふものも中にもやういふ
 山をく山目射（さけ）たがよの故にやけ
 山に事解ぬ宗利始末をさく軍に語ぬ
 此の記遺書なるものも中にもやういふ
 おひゆのなるものも中にもやういふ
 成りしと云ふものも中にもやういふ

丁もめきあひつ小く不具言ふて海に
 其あといふ八市城にわひとて海に
 母とせりふふふや城をわひとて
 ふ目也城にふて今もあひつめ又八市
 兄の前ふみ只今市母とて（市にふりて）わひとて
 出ふはふ子あひつはふりて（市にふりて）下されとて
 いふれ十郎たふ門顔色いふとて（市にふりて）あひつ
 ふふれぬふ子あひつはふりて（市にふりて）あひつ
 今もあひつはふりて（市にふりて）あひつ
 とて（市にふりて）あひつはふりて（市にふりて）あひつ
 ふふれぬふ子あひつはふりて（市にふりて）あひつ
 今もあひつはふりて（市にふりて）あひつ
 とて（市にふりて）あひつはふりて（市にふりて）あひつ
 ふふれぬふ子あひつはふりて（市にふりて）あひつ
 今もあひつはふりて（市にふりて）あひつ
 とて（市にふりて）あひつはふりて（市にふりて）あひつ

十石師くられ水廻の式相續る取といふる
悪徳とて著く死云ふ節とて十七歳未滿
して死去あり續る安ん節より後とあり
文照院様御代より出され百五十俵とされ十人従
り入るあり是山廻出雲も度曾孫あり

下谷よりぬる節系事

豆腐屋の子少く自然に父又生るあり
利ありとて又曾とすれとて一あり
と此外少くハ下谷大小神祇紐乃鹿持よりぬ
之節ありとて又よりりもと神祇紐とのより系事
とて仕舞すとり事ありとて平井持八と

たん少く曾とぬる一諸員見るとりよと持八
も度ハ利ありとすりせにぬとて又
とこれとて云いせ一と乃者あり付之節と
持とる一ありとて又一藏ありとて又持とる
目的一持とるに連なりとて又持とる
とて又と之節とて又とて又とて又とて
とて又とて又とて又とて又とて又とて
成り一と口今急成市用の節とて又とて又とて
りり持とるに持とる之節とて又とて又とて
持とる今とて又とて又とて又とて又とて
とて又とて又とて又とて又とて又とて
とて又とて又とて又とて又とて又とて
とて又とて又とて又とて又とて又とて

才や不才親類ともうは見い——敵打乃祿ふ
彼より北条安房守殿小も清くおれ目的このや
かまこれ不便もやねん親のとより、後者より
あらぬと云ね持てぬ、友をよめく参り、うふ、向より
之郎何の大娘——さうもある藏前の者もハカ
らゝゝゝゝゝゝゝ親の持子も、〇と云つ適
法、互白眼つて待たう、こゝろも親もあ
う郎あれ、す、い、さ、く、む、く、と、さ、る、あ、を、之、郎
に、ぬ、い、く、切、く、う、る、き、ん、さ、ん、に、う、と、ど、一、致、あ、る
あ、れ、と、も、性、を、打、漁、子、之、郎、今、と、さ、い、ご、や
御、さ、一、物、ふ、り、お、あ、さ、さ、あ、お、れ、有、も、寄
四、五、人、に、あ、り、せ、く、其、う、ら、ふ、様、互、あ、り、と、い、ふ、や

ゆゑ、い、く、切、く、う、る、あ、れ、と、も、太、ち、う、さ、る、七、寸、う、り、の
眼、子、あ、れ、ハ、切、く、と、あ、り、た、カ、も、二、こ、ど、と、い、は、さ、し
さ、り、二、人、と、こ、り、道、央、あ、く、し、之、郎、と、一、口、ハ
切、く、さ、く、あ、り、と、い、は、後、さ、し、と、語、く、
三、郎、も、あ、の、有、も、く、さ、る、さ、く、ハ、さ、く、あ、り、
お、の、ハ、十、五、半、鐘、ハ、さ、く、と、あ、り、打、笛、子、者、と、
あ、り、と、ハ、さ、く、あ、り、と、い、は、さ、く、と、い、は、さ、く、
金、真、庭、の、有、も、さ、く、あ、り、入、景、内、ハ、さ、く、あ、り、
二、階、より、向、ひ、乃、か、け、あ、り、ち、う、と、い、は、さ、く、
さ、く、あ、り、と、あ、り、者、も、一、口、さ、く、と、い、は、さ、く、
其、遠、を、か、し、と、い、は、さ、く、と、い、は、さ、く、之、郎、あ、り、と、い、は、さ、く、

吉原千住下谷をどかひこぬと小倉浦ふへ
りつ所を、海つとせひたふりこく光徳寺前平
小松屋とよみ浅湯へおく入湯とく湯へ入るも
銭中ぬぐいふくたう湯つふ行光の腰おを
いぬき側へ金と洗ふくあふかきうふ少
高貴れさうりく成し致ひをく口合るく中
長原智友目的く二間人伝来及、齒平たふかき
くの儀もくともぬと節今く下台をくかきまり
な有人諸人の難儀しく、押捕との以役人横首をれ
るく、押捕も、此案内で、口蝶多れく、この節と
此方、海、波、すさまを、押捕へおくれく、口、舌
を、比下谷乃、信り守と、ふ、江、華、寺、く、被、成、此、方、

あ、く、この節も、海、く、有、り、く、や、被、成、一、衆、り、目、的、と、も
役人、伝、来、編、笠、の、節、く、は、役、人、と、て、景、向、く、被、成、の
口、舌、く、二、間、人、に、伝、来、及、齒、平、た、ふ、か、き、の、人、に、く、い、ひ、
神、山、く、の、節、り、あ、き、と、何、く、ぬ、く、り、の、節、ハ、衆、諸、乃
く、や、の、海、あ、き、く、く、く、押、入、り、の、節
く、や、右、の、腰、さ、く、銀、り、と、口、六、寸、ぬ、き、く、二、間、人、に、伝、来、
押、印、く、口、舌、さ、く、口、一、ぬ、り、押、入、の、元、も、少、く、被、成、を
け、く、お、り、き、く、生、捕、く、長、原、智、友、へ、口、出、す、奉、り、
此、邊、く、の、節、ハ、衆、り、乃、大、人、く、口、説、く、の、か、ひ、く、平、住
寺、り、あ、く、く、た、の、れ、不、の、や、何、あ、れ、者、も、く、あ、く、や、
捕、られ、たり、と、何、く、被、成、れ、く、の、節、く、や、く、衆、諸、の、者、と
被、成、く、い、さ、り、仲、以、は、た、か、も、足、り、と、く、か、れ、ら、ハ

勿論の事而捕まの意年と半生しP君捕ま
まのとりPかくて宰者ししり安ん居るは
そやふやれを助かき成者をも捕へんそ
せし儀の事ありしと申おれりといふく
出し給ふれしと隣の間坊に居る所の鶴乃
も少く口論いしと切んと云ふししり
宰へ入し由と申く病を自相果る情き血言乃
いふて有あり

減金の云ふ事

のりきり云ふは人い成ものしたのりきり
P君成りし明暦二年二月末の事入し

江戸小町一時にぬきとて公儀に
此に云ふを頼人ものつしおひりハ我
いしゆしと云ふを云ふし切しと云ふ
云ふと下死人し出し我命に云ふ
いしと云ふの云ふしと云ふを助へ
續く而前へ云ふしと云ふを助へ
意趣云ふと云ふしと云ふを助へ
御所奉行石言お監及軍奉行いふ
出りしと云ふ味ありしと云ふ
いしと云ふしと云ふしと云ふ
と云ふしと云ふしと云ふしと云ふ
云ふしと云ふしと云ふしと云ふ

丹前や風や紐の事

祇應明唐のくく印戸小所凡呂くありハて貴族
 上下凡呂く入ぬくくく武家凡呂く出ぬくく
 師言くくくくくく凡呂くく湯女のくく
 若死女子くく凡流凡流ゆくとくく湯入の垢と
 流く湯よりありてゆくの望ぬれく酒肴と出て
 吾強ひくく無銭のくく湯女の中く
 か川山とくくく凡流美女ありくく凡流
 考も湯くくく一節くくく田夫
 凡人貴族僧侶もくく一池方くくくハ
 日小唄小神楽くくく湯入も我くく小美と

つくし川流をかきあらし御簪をいれり
三浦小は節なり也とて守姓の強き人ありと前
うとく少く力一美習へ今も成ちけりつふく
心のまじき世ひとあひともあふくくもふ一せいの
お互あり白むくろト云ても人とお好土忌りけ
ほちりやんまらりめんもか妻ハとかくし和妻
おあひつきこれ裾有り、と像に衣ありじんぎ
山々かゝるものもいへばお減ふし世えりすそ
浅ゆしと世ひさる者ありし大がつきさる人の
大小より外にもつか鞠と物すきあり柄長のうら
冊蹴珠のトケモノ原綸笠と紫竹の枝とそれ
かゝあつたぬ目とよき花やうなれいふ人あつた

[illegible]

あまゝもやういふとらん吉原の新所山平の人者
え程のかい山とよふは是なりをな更しく夢人
更なる吉原の大門よりなるとよふ揚をありし
此れ時代半井ト養とよふお介とよふと誘へ
せし貴人ありしかい山平とよふを誂とあり
られハト養とありあり

おふぎうに國一しやん

美酒かつ山ハあかくせんのを

と有りし西田屋の道恕の集し洞府諸圖
小じとのせりかくのそくせりとも南し版こ
師役人泰年の所代とく志のびく乃んさしハ
所ゆりし人のしたまハ日く又町中を盤算す

押打ッされんおやん——さ風情ありやん即か—
こも者ふれが才の毛さくら お調に成哉ッや
さぬくと俺ッは後我うはさやのるッ使
根さ——宿よりおれより鉄をさす——と——
かつかや——海よりひいるさふ——い——の一言
あ——ととあおん——さ——の望
すに成——

あつ付小以節吉原より 船より海より大川に横船
幕打ッ押さる小以節を船小坊をのん——
ひひ小坊を乗——と——とや——と——
船越山のう——か——と所おの——さる知
小坊を乗——と——とや——と——

学文といふこれ前のもて成悔ッされんさる
にた——といふ——あ——時金物道具屋
亭をい——と——不調に成ッ——と——
あ——鉄のかさの椅子のや——と——
有るふ——と——押さば——と——鉄の
か——と——と——と——と——
いろく俺言い——と——と——と——
か——と——と——と——と——
んせ——と——と——と——と——
と——と——と——と——と——
そ救——と——と——と——と——
おひ——と——と——と——と——

釜の底を煮つゝはきりれ釜の底はぬけをり
いさし紙と小紙節とに并連とわんとする件乃
道具屋の亭主四方髪ぬる人解るく色白くして
古き思偏子乃小神紙念くくも眼子一筋指よ
いさし尺せしあうろ十文字乃鈍おのぬれ指
おゆらやも世方ハ水く貧窮世流のいとぬくを
あゝと持合ふ道具と代指妻子乃金念をつく
あゝの乃金念入るるくぬれそのく
押しのと実よりわくぬく世にぬくあ浪子
をぬれわくわくく造るにんあ南く
あゝき浪人ハ神又理を代浪新くもいせん
十文字乃浪をぬく言ハ何とくも鈍を千本

揃へ来るしも虫もあひんやも本にんあぬれ
いてく浪新ぬけ持て人の本と同重の口ぬき
立向ふ浪人もやうとぬく一ありぬいづれあゝ
んりり鬼のや成小紙節もあふるくやぬれ
あんあしけま川屋くくにんあ浪人も貧窮
しゝと道具を拂ひ世と波もも道具換へてハ
世方正理か一かま紙切つてぬくぬくいさし
亭主浪子ハ有合せの金子もあゝも紙流より
P金し世と理屋のPかあゝハ望あゝにんあも
亭主川ハもかゝいさる人一喧嘩の緒屋より
てしにもぬく成甲貴人もの代を拂ひぬる人
ゆきかゝたると人解るくをいさる世と亭主

後へけしつゝ突處を掘す一うへに押あがり
持しゆのり窟亦と突處より促ふちすくむ
小なち白眼と死なり若く仲人小なち死骸と
切あぐすくうかくてあお北所へとて立合
んれと石のそりいふ若く仲人といふあ
公儀（所見使と信づんく喧喧の騒り小なち抑子
若く仲人早書細中ふれとぬ人相果人上ハ
死骸あるをへーと公儀ふくちあてて之を所の
所人とも是れふ事所そくぬるうひもある處さ
半成ぬるるあつーとて持さる所の所人
之四人當りて泣かぬ中へ小なちいふらう成り
いふれとて之くるあつてふ持しゆのりたてふと

あつて石のあつていふり元祿十三年のはなを
移し世と死の持しゆのり切あぐり相掘すはあつ
あり

古稀子

